

The Kagawa Museum NEWS

Vol. **41**

香川県立ミュージアム
ニュース
2018 夏



高松張子と土人形 昭和時代
当館蔵

高松張子、土人形は共に香川を代表する郷土玩具です。右奥の2体は、「奉公さん」と呼ばれる張子です。むかしお姫様のおそばに仕えるおまきという娘が、お姫様の病気をうつしうけて離島に行き、そこで亡くなりました。お姫様の身代わりになったおまきをほめたたえ、人形にかたどったのが「奉公さん」と伝えられています。子どもが病気になる、子どもに抱かせてから海に流すと病気が治るとも言われています。「奉公さん」は古くから魔除け、病除けの力を持つと信じられてきた赤色の着物を身に付けています。

特別展「目からうろこのミュージアム! PartI いろ・かたち、わくわくのみみつ」(8月4日(土)~9月24日(月・祝))にて展示します。

CONTENTS

特集 香川県立ミュージアム10周年記念コレクション展 目からうろこのミュージアム!

調査研究ノート vol.26 土肥大作の苦悩

展示室だより アートコレクション 人の姿I 一顔一香川工芸 明治譚

歴史だより 千当丸をおいかけて

調査研究ノート vol.27 ある建築家の見た“ニッポン”

トピック 分館を改修しました



目からうろこのミュージアム!

香川県立ミュージアムは美術館と歴史博物館の機能を合わせ持つ総合的なミュージアムとして開館して今年で10年を迎え、収蔵する美術作品、歴史・民俗資料の数は、今では30万点にものぼります。

今回、開館10周年を記念し、ミュージアム学芸員「イチオシ」の、目からうろこの収蔵品をPart I・II 2つの会期に分けそれぞれの展示で紹介します。Part Iは「いろ・かたち、わくわくのひみつ」として、日本で古くから暮らしの中に取り入れられてきた色、赤・黒・白・金のものや、変わった形やおもしろい形の資料・作品から、わくわくする色と形の魅力と不思議に迫ります。一方Part IIでは「いつもの暮らし これ、いいね。」として、ちょっと昔の衣・食・住に関わる資料を、オシャレでモダンな空間に再現します。

Part I 「いろ・かたち、わくわくのひみつ」



写真1 飛龍丸の御座の間の装飾(再現)

写真提供:丹靑社 撮影:ヴィスタジャパン 廣崎節雄

第1章 光かがやく特別な色、金

金は光り輝く美しさから人々の心を魅了し、古くから権力や財力の象徴とされてきました。第1章では、お殿様の好んだ豪華な金の調度品や金色で表現された仏の姿、また金で彩られた作品などを紹介します。

【写真1】は江戸時代の絵図をもとに実物大で再現した、高松藩の御座船、飛龍丸の御座の間です。御座船とは大名専用の船のことで、高松藩では主に参勤交代で江戸へ向かう際に使用されていました。御座の間は船の中で藩主が過ごしていた場所です。その内観は床の間や襖、天井に至るまで金砂子(金箔を細かく砂状にしたもの)などを用いてきらびやかに装飾されており、大名の威厳を感じさせます。



金彩によって華やかに装飾され、ふっくらと丸みを帯びた表面には、波立つ水面を優雅に泳ぐ鳥や、水辺にゆれる植物が繊細な線で彫られている。

写真2 北原千鹿「金彩遊禽水指」
昭和15年(1940)頃

第2章 白と黒、モノトーンの世界

白と黒は、誕生・結婚・死などの人生の節目に深く関係しています。第2章では、人の一生に関わる白と黒の衣類や道具、白と黒のモノトーンで表現された作品の世界を紹介します。

【写真3】の白無垢は現在でも婚礼の際に花嫁が着る衣裳です。なぜ花嫁衣装は白なのでしょう。「嫁ぎ先の色に染まります」という説もありますが、白は清らかで穢れのない色、また「死」や「他界」を示す色ともとらえられていました。女性は相手の家に嫁ぐ際一度死に、婚家の嫁として新たに生まれ変わると考えられていたため、「死」を象徴する白を身に付けるようになったようです。現代では黒が主流の喪服も、かつては白い装束が着用される地域でもありました。

【写真4】は秋山泰計作「筋のない話」という木版画の作品です。画面の中には、人、牛、馬、猫、鳥、魚…たくさんの動物がひしめき合っています。白い部分を見ていると、同時に黒の部分の形が見えてくるだまし絵のよう。泰計らしい力強く迫力ある彫りの跡にもご注目ください。



写真3 白無垢 昭和時代



写真4 秋山泰計「筋のない話」
昭和44年(1969)

第3章 赤のパワー

赤は炎や血の色であり、太陽の色にも通ずることから神聖視され、古代より呪いや厄除けなどに使われてきました。第3章では、赤い色の器や郷土玩具などの資料や太陽や炎といった赤を題材にした作品から、赤のもつパワーに迫ります。

【写真5】の錦絵は、平賀源内作の浄瑠璃「神霊矢口渡」の登場人物、船頭頓兵衛を市川団十郎が演じた姿を描いています。赤の隈取は「荒事」の様式として初代市川団十郎が創始したとされており、もともとは顔の血管や筋を大げさに表現したもので、勇気や超人的な力強さを象徴しています。

※超人的な力を、武勇・豪快・凄味などを誇張して表現する演出



とよはらくにちか
写真5 豊原国周
「市川団十郎演芸百番 船頭頓兵衛」
明治31年(1898)

第4章 おもしろい形、ふしぎな形

第4章では、ちょっと変わった形の武具や調度品、そして動きが感じられる形の彫刻や書、絵画を紹介します。

展示資料の中には、【写真6】のようにかなり印象的な見た目のももあります。その名も「^{ぼくまくら} 獭枕」。枕のデザインになっている。獭は中国から日本へ伝わった架



写真6 獭枕
高松藩御用商人松屋資料
伝桃山時代

空の動物で、人の夢を食べると考えられています。悪夢を見た際に獭枕に頭を乗せると獭の口が開き、獭が悪い夢を食べてくれるというまじないに使われていたようです。歯の部分は動物の骨が用いられており、一度見たら忘れられないインパクトがあります。

写真7 堀内正和「箱は空に帰っていく」
昭和41年(1966)
箱の中にはまた小さな箱が…反復する形の中にも、少しずつ手から箱が離れていく変化が感じられる。



PartII 「いつものくらし これ、いいね。」

日本ならではの身近な習慣や風習、行事などに使われていた服飾や食器などを現代風にアレンジして、オシャレに展示します。時空を超えた不思議体験をお楽しみください。詳しい展示内容は次号NEWSでご紹介します。

(主任主事 岡本由貴子)

展覧会情報

香川県立ミュージアム10周年記念コレクション展
目からうろこのミュージアム!

8月4日(土)~11月25日(日)

PartI いろ・かたち、わくわくのひみつ

8月4日(土)~9月24日(月・祝)

会場：特別展示室

開館時間：9:00~17:00(入館は閉館の30分前まで)

※夜間開館：8月10日、9月21日 ~19:30

休館日：月曜日(ただし8月13日、9月17日・24日は開館)、9月18日(火)

観覧料：(全会期共通)一般800円/団体640円

(各会期)一般500円/団体400円

高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料

関連イベント

展覧会関連イベント盛りだくさん!

p.8 インフォメーション欄もご覧ください

■コンサート「いろ・かたち、わくわくコンサート」

当日先着順 参加料無料

歌やパネルシアター、楽器の生演奏など、子どもから大人まで楽しめます。

日時：9月17日(月・祝) 13:30~50分程度

場所：1階 図書コーナー

演奏者：みゅーじっくすべーす・コモド

定員：80名(多数の場合は立見可能) ※開演30分前より受付開始

■ミュージアム・トーク

展示担当が見どころをご案内します。

申込不要：参加料無料(特別展観覧券必要)

日時：昼の部 8月26日(日)、9月2日(日)、9日(日)、23日(日)

各日13:30~30分程度

夜の部 8月10日(金)、9月21日(金)

各日18:00~30分程度

■キッズ・トーク

子どもを対象に、いろかたちを体感できるツアーです。

当日申込：参加料無料(保護者は特別展観覧券必要)

日時：8月5日(日)、25日(土)、9月22日(土)

各日14:00~30分程度

対象：小学生(小学3年生以下は保護者同伴)

定員：各回15名

申込：当日受付(各回15分前から受付開始)

育児の日関連イベント

「育児の日おやこツアー」

日時：9月19日(水)

午前の部 10:30~11:30/午後の部 14:00~50分程度

事前申込：保護者の方は育児の日割引があります。

詳細は展覧会チラシ・ホームページをご覧ください。

どひだいさ 土肥大作の苦悩

今年は「明治150年」にあたり、各地で関連した展覧会や行事が行われています。江戸から明治にかけては新しい社会に向かって大きな変動があった時期であり、意見の対立や衝突が各地で発生した時期でもあります。今回は明治時代に入っ
てすぐに丸亀県で起きた襲撃事件の被害者・土肥大作について紹介します。



写真1 土肥大作肖像写真

丸亀藩では明治4年(1871)、旧丸亀藩士で幕末に尊王運動に加わり、後に明治政府に仕えた土肥大作を、同じ旧丸亀藩士が襲撃するという事件が発生しています。丸亀藩が藩を返上し新政府の下で新しく県となろうとしている時で、江戸時代の武士身分であった士族に給付されていた家禄の削減もあわせて行われていました。このことに不満を持った者たちが大作を襲ったのでした。

明治政府に仕えていた大作は、新政府の政策を喜んで推進していたのでしょうか。丸亀市立資料館所蔵の土肥家に伝わる記録や文書をもとにみてみるとそうではないことが分かってきます。

大作は明治政府から事務能力を認められ、明治元年には三河県(現愛知県の一部)の役職に任じられました。翌年には出身である丸亀藩の権大参事(藩知事の下、藩の事務を総括する役職)に任じられます。しかし、大作は自分の体調がすぐれないこと、能力が及ばないことを理由に辞職を願っています。三河県での経験から、自分の出身藩で新政府の政策を推し進めることの難しさを感じていたものと考えられます。大作の願いは聞き届けられず、明治4年4月まで業務にあたります。

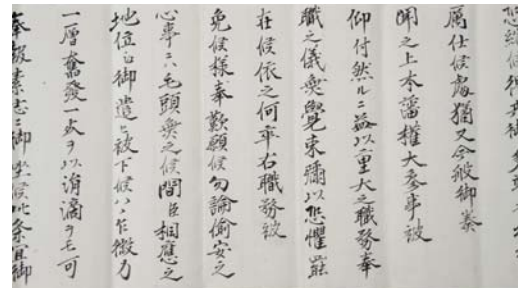


写真2 土肥大作の丸亀藩権大参事辞職願(部分)

続いて大作は新政府の民部省へ出仕することを命じられますが、ちょうどそのころ丸亀藩は藩を返上し、県の設置を申し出ます。今度は、大作は政府に置県の趣旨が貫徹するよう働きたいとの理由で50日間の暇を願い出て帰郷します。襲撃事件はこのときに発生しました。

権大参事の任命の時には辞職を願い出、置県の時には志願して帰郷する。矛盾しているようにみえる大作の行動は、変革の困難さと郷土を新しい体制にしたいという二つの想いの間で揺れる彼の苦悩を表しているといえます。そんな苦悩を抱えていた大作にとって同じ元武士からうけた襲撃は大きな衝撃であったことでしょう。

展覧会「讃岐の幕末—新時代到来のゆらぎ—」では、土肥大作の例にみられるような、江戸から明治へと大きな社会変革が行われた中で発生した対立や衝突などに焦点をあてていきます。日本の近代化の出発点となった「明治」について考えていただく機会になればと考えています。

(主任専門学芸員 御厨義道)



写真3 土肥大作が丸亀置県のための暇を求める願書(部分)

展覧会情報

明治150年関連企画

讃岐の幕末—新時代到来のゆらぎ—

8月3日(金)~9月24日(月・祝)

会場: 常設展示室1

■ミュージアム・トーク

日時: 8月18日(土)、9月15日(土) 各13:30~

※写真はすべて土肥家資料、丸亀市立資料館蔵

常設展示室 2

アート・コレクション 人の姿 I — 顔 —

7月24日(火)～10月8日(月・祝)

※8月28日(火)から一部作品の展示替があります。

本展では、人物をテーマにI期・II期にわたって当館の所蔵品を紹介します。芸術家にとって、人物は最も身近なモチーフの一つです。鏡に映った自分の顔を描いたり、家族・友人といった身近な人をモデルに描いたり…。その中でもI期でとりあげる顔は、芸術家を惹きつけてやみません。目・鼻・耳・口といった共通するパーツで出来ていながら、誰一人として同じものはない顔。表情や視線からは、いったいどういう人だったのだろう、どうしてこんな表情をしているの?と想像が膨らみます。一番身近にあるけれど、見れば見るほど引き込まれる「顔」の世界をどうぞお楽しみください。

(学芸員 瀧上華)

■ミュージアム・トーク

日時:8月4日(土)、9月22日(土) 各13:30～



出水徹《レッドアゲインストブルー》1997年 当館蔵

常設展示室 4・5

明治150年関連企画 アート・コレクション 香川工芸 明治譚

7月28日(土)～9月24日(月・祝)

さあさあ皆様、御立会い。時は明治。二百七十余年の鎖国を終えた日本は、文明開化と共に新しい時代の幕開けを迎えた。日本文化が諸外国へ紹介される一方で西洋文化の波は国内へ押し寄せ、社会全体が大きく変化を成し遂げた。江戸時代に領主の庇護のもとその技が磨かれた武具や高価な茶器においても、明治維新を迎えて需要が激減し、新時代の「工芸」は輸出産業にひとつの活路を見出した。折しも殖産興業が叫ばれ、国を挙げての産業振興を背景に工芸は近代への道を歩み始めたのだった。

香川県においては、高松藩御抱えの甲冑師であった金工の明珍宗春はもとより、明治2年に没した玉楮象谷の末裔、蔵黒、雪堂、藤川の名を継ぐ黒斎、蘭斎、「百花園の俊傑」たる石井磬堂ら漆芸の匠たちもこの激動の時代を生き、今に繋がる香川工芸の礎を築き上げた。ここに示すのは香川工芸の昔語りであり、近代工芸の始まりの物語である。

(主任学芸員 一柳友子)

■ミュージアム・トーク

日時:8月11日(土・祝)、9月8日(土) 各13:30～



明珍宗春「鳳凰文鉄香炉」明治時代 当館蔵
撮影:高橋章



藤川蘭斎「堆黒香炉台」当館蔵 撮影:高橋章

せんとうまる 千当丸をおいかけて

—テーマ展「瀬戸大橋架橋の島々の民俗写真展」の調査から—

平成30年4月に瀬戸大橋は開通30周年を迎えました。瀬戸大橋が架かっている島々の人たちの生活は、架橋以前と以後では大きく変わりました。

備讃・架橋の島々の物流を支えた 渡海船 千当丸

架橋の島々の人や物資の移動は、現在、瀬戸大橋を通じて、バスや自動車などによりますが、架橋以前は渡海船(トウカイ)とよばれていた船で行われていました。今回、架橋の島々を含む坂出・下津井間を定期航路で運航していた、渡海船千当丸について調査しました。

千当丸を運航していた千当海運は、大正13年(1924)10月に与島出身の森安藤太郎氏が創設し、渡海船による坂出～瀬居島～与島～小与島～岩黒島～櫃石島～下津井～味野の定期航路を開設しました。昭和28年(1953)から運航回数は1日4往復となり、各島で教職員・役場職員及び学生の通勤・通学や郵便集配、さらに家庭に必要な日用品の輸送など幅広く行い、島々の人の生活を支えていました。しかし、瀬戸大橋開通とともに千当海運はその役目を終え、千当丸の姿を見ることもなくなりました。



千当丸(昭和55年)

元千当丸船長・蓮井忠次氏への 聞きとり調査より

昭和30年代から瀬戸大橋開通の昭和63年(1988)まで、千当丸を操船していた元船長の蓮井忠次氏に当時のことを尋ねました。

蓮井氏によると、千当丸を操船する際に一番注意を払ったのが、時化と濃霧が発生した時です。視界不良となり、船同士



千当丸操船中の蓮井忠次氏(蓮井忠次氏提供)

の衝突の危険性が高まります。この当時はレーダーなどの機器がありませんでした。また、千当丸は貨物だけでなく、旅客も乗船するということもあり、蓮井氏は、舵などの機器類の点検を出港前・帰港後に必ず行い、安全確認に細心の注意を払いました。さらに当時の島々には栈橋がなく、防波堤などに船首をつけて着岸する「オモテツケ」であったため、船の破損や、旅客の乗り降りの際の安全を考える必要がありました。そのため難易度が高い操船技術が必要でした。

蓮井氏は、かつて味野(岡山県倉敷市児島味野)の営業所に寝泊まりしていた時期もありました。夜には児島でつくられた学生服などの衣類を扱っている商人が、営業所に持ち込む荷受けを行い、千当丸に積み込む必要があったためです。

また、千当丸は、坂出近海ではとれない鯖や鯛などの魚介類を下津井から坂出の魚市場に、雑貨類を坂出から島々に、さらに下津井の間屋が八百屋から注文を取り、坂出の市場で購入した野菜や果物を下津井まで運びました。

このように千当丸は、蓮井氏の操船のもと、多くの旅客や貨物を乗せ、架橋の島々を結んでいました。

瀬戸大橋開通から30年がたち、渡海船千当丸の資料をみつけることが難しくなってきました。しかし、今回の調査で、坂出や架橋の島々の人たちに、千当丸の名前を告げると、多くの人たちが、懐かしそうに千当丸の話をしてくれました。

今回、渡海船千当丸に焦点を当てることにより、架橋の島々の人たちの生活の変化を考える機会のひとつになればと思います。

(瀬戸内海歴史民俗資料館 主任専門職員 芳澤直起)

※展覧会情報はp.8をご覧ください。

ある建築家の見た“ニッポン”

当館で平成31年度開催予定の「建築の日本展」。建築の中に「日本らしさ」がいかに表現されてきたかを、いくつかの「自画像」を描く試みとして紹介するのがテーマです。ここでは建築家・神谷宏治氏(1928～2014年)の館蔵資料を中心に、展覧会に向けての調査研究の一端をご紹介します。

神谷氏は東京・両国で建材業を営む家庭に生まれ、昭和20年(1945)の東京大空襲で家族3人を失う凄絶な体験をしました。疎開先で入学した旧制静岡高校在学中に建築を志し、登呂遺跡の発掘現場で日本の伝統の根源的なあり方に接します。昭和27年(1952)に東京大学工学部建築学科に入学、新進気鋭の建築家・丹下健三に師事。卒業論文は、「都市のコア 江戸」。江戸の床屋や寄席などに、「人々の心の拠り所」を見出そうとしました。戦後民主主義にふさわしい「都市の広場」のあり方が、公共建築で模索された時代でしたが、それを日本的に読み替えようとしたのです。

昭和29～33年(1954～58)、神谷氏は香川県庁舎の設計・建設に丹下研究室のメインスタッフとして関わります。1957年(昭和32)、建物躯体がほぼ完成し、建物内部の床石や石机の施工、ピロティとロビーをつなぐ南庭の設計・施工に取りかかりました。小豆島での床石の整形作業を見に行った神谷氏たちは、大坂城の「残念石」など、讃岐の豊かな石文化に触れます。また、庵治の山中で見出された花崗岩の自然面を活かした石の受付カウンター制作に立ち会いました。南庭の設計を任された神谷氏は、庭石の採取場所の一つ坂出市加茂町を訪れ、農村の民家や習俗に関心を向けます。時間の経過を表す



神谷氏が見た石祠

民家の土壁、刈入れ後に積み重ねられた稲藁、山々を背景に規則正しく佇立する江戸時代の墓石…。神谷氏に最も強い印象を



竣工した香川県庁舎南庭と庭石

刻んだのは、山裾に置かれた石の祠でした。風化し割れた祠にシヴァリング(シヴァ神の性器を表したヒンドゥー教の信仰対象)のイメージ、つまり「豊穡のシンボル」を見出した神谷氏は、高層棟と向かい合って伸び上がる彫刻的なメインの庭石の構想へとたどり着きます。子どもの頃、回遊式庭園を遊び場にした原体験に加え、香川の石文化に触れたこと、また国内外の石を熟知した庵治の岡田石材と協働したことが、香川県庁舎に豊かで日本的な広場を実現することになったのです。

香川県庁舎での経験は、その後の神谷氏の仕事(県営一宮住宅、日本万国博覧会お祭り広場、沖縄国際海洋博覧会基幹計画、川崎市民プラザ、コープタウン松が谷)の原形をなしているように見えます。「自分が関わった建築の将来を心配するとは思わなかった」と苦笑していた神谷氏は、県庁舎東館の耐震化の決定を見届け、2014年(平成26)にこの世を去りました。戦後復興から高度成長への転換期に、日本のアイデンティティが強く求められ、建築家たちがその課題に真摯に向き合った時代性に、私たちも真摯に向き合いたいと考えています。

(学芸課長 佐藤竜馬)

展覧会情報

パネル展 与島と大川村

日時:7月28日(土)～9月24日(月・祝)

会場:2階ロビー

トピック

分館を改修しました

平成29年度、香川県立ミュージアムの分館「瀬戸内海歴史民俗資料館」と「香川県文化会館」は主に電気・空調などの設備改修のため、施設利用制限をしていましたが、この春からは2館とも通常再開しています。

瀬戸内海歴史民俗資料館では「絶景展望台」がリニューアルしました。展望デッキから、館周辺の四季折々の色鮮やかな草花や瀬戸内海の多島美を座って見ることができます。



瀬戸内海歴史民俗資料館の絶景展望台

夏休みキッズワークショップ

① 立体地図を作ろう — 香川県の城あとと編 —

香川県の立体地図を作り、各地の城あとを位置付けながら、城の歴史を学ぼう。

日時：7月22日(日) 13:00~16:00

場所：地下1階 研修室

講師：当館ボランティア・当館職員

対象：小・中学生24名(小学3年生以下は保護者同伴)

参加料：400円

申込期間：6月19日(火)~7月8日(日) 消印有効



写真はイメージです

② 戦争中は何を食べていたの? — 麦めしとみそ汁編 —

物が不足した戦争中に食べられた麦めし、みそ汁などを作ります。また、石うすで大豆を挽(ひ)いたり、戦争中の生活の体験談を聞いたりして、当時の暮らしにふれてみよう。

日時：8月5日(日) 10:00~12:00

場所：地下1階 実習室

講師：当館ボランティア・当館職員

対象：小学生とその保護者 12組

(1組につき小学生2名、保護者1名まで)

参加料：1名につき200円

申込期間：6月26日(火)~7月17日(火) 消印有効



写真はイメージです

③ 子ども びじゅつ かんしょう教室

日時：8月12日(日) 13:30~14:30

場所：2階西ロビー、常設展示室2

対象：5歳~小学生 14名(未就学児は保護者同伴)

参加料：無料(ただし保護者は常設展観覧券が必要)

申込期間：6月26日(火)~7月24日(水) 消印有効

④ 子ども れきし 教室 一刀を学ぼう —

日時：8月12日(日) 10:30~11:30

場所：地下1階工作室

対象：小学4年生~中学3年生 10名(未就学児は保護者同伴)

参加料：200円

申込期間：6月26日(火)~7月24日(水) 消印有効

特別展「目からうろこのミュージアム!」関連ワークショップ

① 江戸時代のかぶとをまねて、自分だけのかぶとを作っちゃおう

日時：8月11日(土・祝) 13:00~16:00

講師：川崎展子(造形作家)

対象：小学生30名(小学3年生以下は保護者同伴)

参加料：300円(保護者は当日の特別展観覧券が必要)

申込期間：6月26日(火)~7月17日(火) 消印有効



② 墨で遊ぼう

日時：8月18日(土) 13:00~15:00

講師：樋笠幸三(墨アーティスト)

対象：4歳以上、どなたでも 30名

(小学3年生以下は保護者同伴)

参加料：200円

申込期間：6月26日(火)~7月24日(火) 消印有効



③ 流木でカラフルな魚を作ろう

日時：8月19日(日) 13:00~15:00

講師：四宮龍(造形作家)

対象：小学生 15名

参加料：500円

申込期間：6月26日(火)~7月24日(火) 消印有効



④ マスキングテープで和のコースター作り

日時：9月15日(土) 10:00~16:00

場所：2階西ロビー

参加料：100円

事前申込不要



ワークショップの申込方法

往復はがき(1枚につき2名まで)、「かがわ電子自治体システム」(*)を利用したインターネットから。往復はがきの場合は、ワークショップ名、氏名(ふりがな)、年齢(学年)、住所、電話番号を明記してください。応募者多数の場合は抽選となります。抽選の結果の発信・発送は締切日から1週間ほどで行う予定です。

申込先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247 FAX.087-822-0049

瀬戸内海歴史民俗資料館テーマ展

観覧料無料

●瀬戸大橋開通30周年関連企画

テーマ展「瀬戸大橋架橋の島々の民俗写真展」

会期：7月7日(土)~9月2日(日)

場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 第9・10展示室

開館時間：9:00~17:00 ※入館は16:30まで

休館日：月曜日(月曜日が休日の場合は、翌日火曜日)



れきみん普及事業

要事前申込

① れきみん講座「渡海船をひいて」

瀬戸大橋開通以前、架橋の島々の人たちの生活を支えていた渡海船を追跡調査し、島々の変化について考えます。

日時：8月4日(土) 13:30~15:00

場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室

講師：芳澤直起(主任専門職員)

定員：40名(先着順)

申込期間：7月7日(土)~、定員になり次第終了

② ワークショップ「瀬戸内の島を訪ねる② — 沙弥島 —」

かつて島であったが、番の州埋め立て工事により陸続きとなった坂出市沙弥島を訪ね、歴民職員の案内で見学するとともに、沙弥島の関係者からお話を伺います。

日時：9月2日(日) 9:00~12:00

場所：坂出市沙弥島(現地集合・現地解散、旧島内を徒歩にて移動)

集合場所：瀬戸大橋記念館西駐車場(坂出駅より路線バスで約20分)

講師：歴民職員ほか

定員：30名

保険料：50円

申込期間：7月24日(火)~8月22日(水)

① れきみん講座の申込方法

電話、はがき、FAX、「かがわ電子自治体システム」(*)を利用したインターネットから。はがき、FAXの場合は、氏名、電話、講座名を明記してください。

② れきみんワークショップの申込方法

往復はがき(1枚につき3名まで)、「かがわ電子自治体システム」(*)を利用したインターネットから。往復はがきの場合は、氏名(ふりがな)、住所、電話番号、児童生徒は学年、ワークショップ名を明記してください。応募者多数の場合は抽選となります。

申込先：〒761-8001 高松市亀水町1412-2 瀬戸内海歴史民俗資料館

TEL 087-881-4707 FAX 087-881-4784

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」

香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック



カフェポット ミュゼ

開館10周年のアニバーサリーデザートを開発中!



写真はイメージです

ミュージアムショップ

夏の特別展に合わせ、新商品を多数取り揃えております!



■営業時間：開館時間と同じ

香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
http://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10-39
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807

